

稲・大豆作情報（NO. 2）

1. 水稻作況情報田の生育概況（7月9日現在）

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概況
			草 丈 c m	茎 数 本/㎡	葉 齢	SPAD	
夢しずく 佐賀市本庄町	6/17 18.0株/㎡	本 年 平 年 平年比	34.7 37.6 (92)	248 200 (124)	8.3 7.6 (+0.7)	42.4 40.7 (+1.7)	移植後は高温が続き、6月27日の梅雨明け以降、平年より高温・多照で経過している。
さがびより 小城市芦刈町	6/22 18.4株/㎡	本 年 平 年 平年比	28.1 32.1 (88)	164 156 (105)	6.6 7.2 (-0.6)	34.5 37.2 (-2.7)	○草丈は「夢しずく」、「さがびより」「ヒヨクモチ」とも平年よりやや低い。 ○茎数は「夢しずく」が平年より多く、「ヒヨクモチ」「さがびより」で平年並み。
ヒヨクモチ 神崎市千代田町	6/20 16.0株/㎡	本 年 平 年 平年比	23.2 28.3 (82)	198 201 (99)	7.7 7.6 (+0.1)	40.9 38.3 (+2.6)	○葉齢は「夢しずく」で平年よりやや進んでおり、「ヒヨクモチ」で平年並み、「さがびより」で平年より遅れている。
ひなたまる 佐賀市大和町	6/20 18.4株/㎡	本 年 平 年 平年比	29.1 - -	173 - -	7.5 - -	36.6 - -	

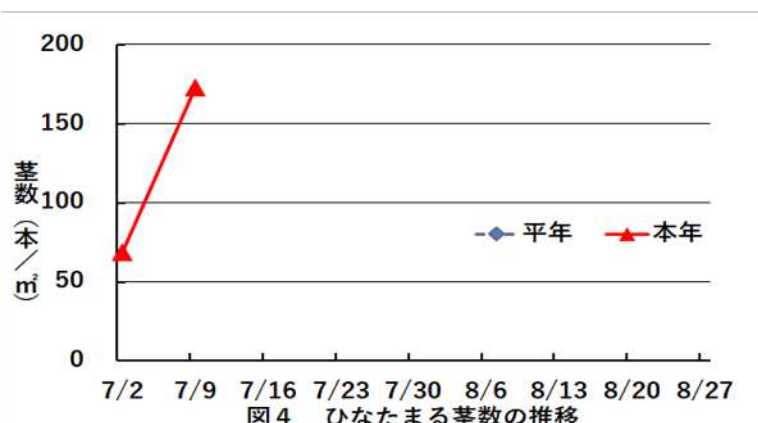
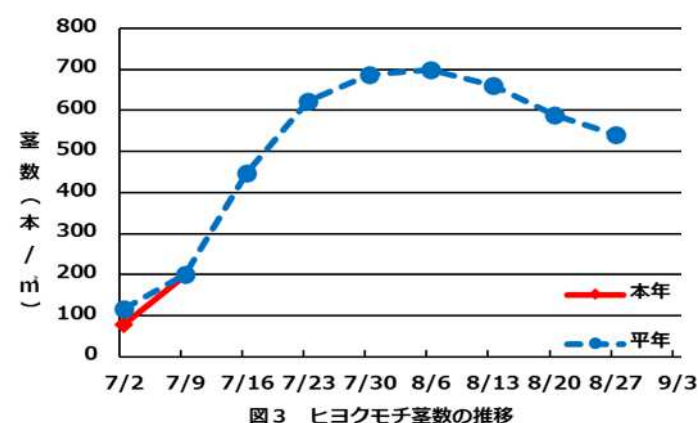
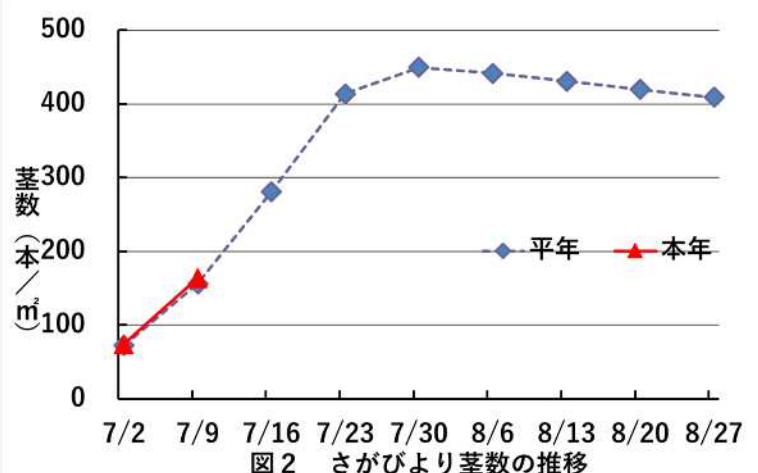
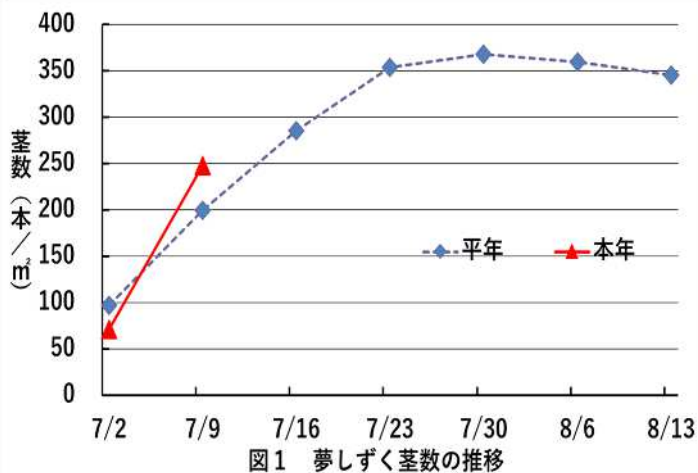
注1) 各品種 前作：麦

注2) 施肥及び病虫害防除は地区基準に準ずる

注3) 平年値は、過去10年間（H27～R6）の平均値（さがびよりについては、R1年を除くH27年～R6年の平均値）

注4) ヒヨクモチは昨年度から神崎町のデータを用いています

注5) ひなたまるはR7年から作付けのため、本年のみの記載になります。



◆農業試験研究センター米づくり情報2号 7月9日(抜粋)

移植日	項目 品種	年次	草丈 cm	茎数 本/m ²	葉齢 L	葉色 SPAD	概況 (平年または前年との比較)
6月18日	夢しずく	本年	30.2	268	7.8	35.6	【気象】 7月1日～8日まで ◆平均気温…4.8℃高い ◆日照時間…長い (平年比 290%) ◆降水量…少ない (平年比 3%) 【生育】 ◆草丈 「夢しずく」、「ヒノヒカリ」、「さがびより」は低く、「ひなたまる」、「ヒヨクモチ」はやや低い。 ◆茎数 全品種で多い。 ◆葉齢 「夢しずく」、「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」は進んでいる、「ヒヨクモチ」はやや進んでいる。 ◆葉色(SPAD 値) 「夢しずく」、「ひなたまる」、「ヒヨクモチ」は濃い、「ヒノヒカリ」、「さがびより」は平年並み。
		平年	34.7	193	7.2	30.3	
		平年比(差)	87	139	(+0.6)	(+5.3)	
	ヒノヒカリ	本年	25.4	329	8.2	36.6	
		平年	28.7	250	7.4	36.9	
		平年比(差)	89	132	(+0.8)	(-0.3)	
ひなたまる	本年	31.8	295	8.4	40.5		
	前年	33.1	196	7.7	36.9		
	前年比(差)	96	151	(+0.7)	(+3.6)		
6月20日	さがびより	本年	26.1	256	7.8	37.9	
		平年	30.4	173	7.2	37.8	
		平年比(差)	86	148	(+0.6)	(+0.1)	
	ヒヨクモチ	本年	26.3	432	8.1	42.7	
		平年	27.5	310	7.7	39.7	
		平年比(差)	96	139	(+0.4)	(+3.0)	
留意点	○水管理により、生育差が生じやすい気象となっている。 ○高温・多照条件下で湛水を継続すると根の機能低下が著しいため、一定の落水期間を取る等根の機能維持に重きを置いた管理に努める。 ○「ヒノヒカリ」「ヒヨクモチ」等の品種では、追肥の時期を迎えているため、時期を逸しないよう施用する。						

※耕種概要等は前号参照。

2. 水稻における今後の管理

今後も気温の高い日が続き、降水量は平年並みかやや少ない予報となっている。特に表層剥離や藻類の多発圃場が多くみられるため、一時落水(黒乾状態を保つ)や夕方～夜間のかけ流し灌漑を実施する。

○水管理 ～ 圃場の状況に応じた水管理の徹底 ～

- ・藻類や表層剥離が多く見られる圃場では、一時落水し土面に藻類等を吸着させた後に再度入水する。
- ・麦わらのガス障害が多い圃場では、土中への酸素供給のため間断灌水とし、移植後15日、25日目のガス抜きのための落水処理や中干しを徹底する。
- ・スクミリンゴガイの発生が多い圃場では被害を避けるため、浅水管理を基本とし必要に応じメタアルデヒド剤等の薬剤防除を実施する。



藻類で苗がなぎ倒された圃場



落水し藻類等を土面に吸着

(早植え水稻)

- ・有効茎が確保できている圃場では、中干しを開始する（目安は表1を参考）。
- ・中干しは、軽い亀裂が入り足跡がわずかにつく程度とする。
※砂壤土での強い中干しは、漏水の原因となるため、土壌表層に軽い亀裂が入る程度で黒乾状態を保つ。

(普通期水稻)

- ・分けつの確保及びスクミリングガイの被害回避のため、浅水管理を基本に行う。
- ・移植後35日頃には、有効茎が確保され中干し時期を迎える。中干しは、根の伸長を促し、活力を高める働きがあるが、根が切れるような強い中干しは避け、軽い亀裂が入り足跡が軽くつく程度とする。

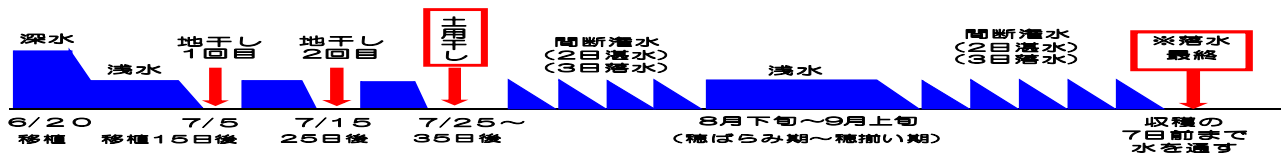


表1 品種別の中干し時期

品種	目標穂数 本/㎡	有効茎数(中干し時期)		
		50株/坪(15.2株/㎡)	60株/坪(18.2株/㎡)	70株/坪(18.2株/㎡)
夢しずく	360	24本/株	20本/株	—
コシヒカリ	370	24本/株	20本/株	—
ひなたまる	340	—	19本/株	16本/株
さがびより	370	24本/株	20本/株	—

○雑草防除

- ・除草剤散布ができなかった圃場や散布が遅れた圃場、及び処理後に田面が露出した圃場などでは、放置するとヒエや広葉雑草が繁茂し、薬剤による雑草防除が困難となるため、中後期除草剤との体系処理を検討する。なお、藻類や表層剥離が多発し除草効果の低下が懸念される圃場でも、ヒエや広葉雑草の発生が懸念されるため、圃場の状況を確認し、中後期除草剤との体系処理を検討する。

対象	除草剤名	使用時期	備考
ヒエ類	クリンチャー I 粒剤	移植後7日～バエ4L 但し、収穫30日前まで	湛水散布(3～4日は湛水)
	クリンチャー EW	移植後20日～バエ6L 但し、収穫30日前まで	落水散布。展着剤加用。
	ヒエクリーン I 粒剤	移植後15日～バエ4L 但し、収穫45日前まで	湛水散布(3～4日は湛水)
広葉雑草	バサグラン粒剤	移植後15日～55日 但し収穫60日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。 最低3日間入落水しない。
	バサグラン液剤	移植後15日～55日 但し収穫50日前まで	高温条件下では、薬害が生じやすいのでタ方散布。
ヒエ類 および 広葉雑草	クリンチャーバス ME 液剤	移植後15日～バエ5L 但し収穫50日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。最低3日間入落水しない。高温条件下では、薬害が生じやすいのでタ方散布。(展着剤無加用)
	ハイカット I 粒剤	移植後15日～バエ3.5L 但し、収穫60日前まで	湛水散布(3～4日は湛水)
	フォローアップ I 粒剤	移植後15日～バエ5L (稲4葉期以降) 但し、収穫60日前まで	湛水散布(3～5日は湛水)
	ワイドアタック SC	移植後20日～バエ6L (稲5葉期以降) 但し、収穫30日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。(展着剤無加用)
	ロイアント乳剤	移植後20日～バエ5L 但し、収穫45日前まで	落水散布～ごく浅く湛水散布。

○中間追肥 ～ヒノヒカリ、ヒヨクモチ～

- ・元肥に即効性の肥料（BB480 等）を使用した場合は次の通り。

「ヒノヒカリ」：7/5～10頃、窒素成分で2.0 kg/10a（BB480：15kg/10a）程度

「ヒヨクモチ」：7/15頃、窒素成分で1.6～2.1 kg/10a（BB480：12～15kg/10a）程度

○病害虫情報（発生および防除）

- ・セジロウンカとトビイロウンカは6月16日～23日に飛来が確認されている。
- ・コブノメイガは6月16日頃から飛来が確認されている。
- ・今後、飛来があった場合は、それぞれの地区・品種別に発生状況を確認し、防除時期の判断・適期防除に努める。
- ・今後、発生予測は随時更新されるため、防除の考え方等については、最新情報を農業技術防除センターのホームページで確認してください。

佐賀県 農業技術防除センター



月	日	トビイロウンカ				セジロウンカ				コブノメイガ					
		佐賀県		長崎県		佐賀県		長崎県		佐賀県					長崎県
		佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	佐賀市	神埼市	伊万里市	白石町	武雄市	諫早市
		ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップ	ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップ	フェロモン トラップ	粘着トラップ (20W蛍光灯)	フェロモン トラップ	フェロモン トラップ	粘着トラップ (20W 蛍光灯)	フェロモン トラップ
6月	1日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			0	0
	2日	0	0	0	0	0	0	0	0	0				0	0
	3日	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0			0	0
	4日	0	0	0	0	0	0	0	0	0				0	0
	5日	0	0	0	0	0	0	0	0	0				0	0
	6日	0	0	0	0	0	0	0	0	0				0	0
	7日	0	0	0	0	0	0	0	0	0				0	0
	8日	0	0	0	0	0	0	0	0	0				0	0
	9日	0	0	0	0	0	0	1	0	0				0	0
	10日	0	0	0	0	0	2	4	0	0				0	1
	11日	0	0	0	0	0	0	0	0	0				0	0
	12日	0	0	0	0	0	1	1	0	0				0	0
	13日	0	0	0	0	0	0	0	0	0				0	0
	14日	0	0	0	0	1	0	1	0	0				0	3
	15日	0	0	0	0	0	0	0	0	0				0	0
	16日	0	2	0	0	3	9	0	0	0				1	7
	17日	0	0	0	0	0	4	0	0	0				1	1
	18日	0	0	0	0	3	4	0	4	0				0	0
	19日	0	0	0	0	0	2	0	0	0				6	0
	20日	0	0	0	0	0	0	0	0	0				1	0
	21日	0	0	0	0	1	1	0	0	0				1	0
	22日	0	1	0	0	0	26	0	1	0				0	0
	23日	0	2	0	0	2	126	2	0	0				0	0
	24日	0	0		0	2	139		0	0				0	2
	25日	0	0		0	2	12		0	0				1	0
	26日	0	0		0	1	8		0	0				0	0
	27日	0	0		0	0	7			0				1	
	28日	0	0		0	0	1			0					
	29日	0				0									
	30日	0				0									

注1)ウンカ類：佐賀市のネットトラップは、農業試験研究センターで調査（回収日で集計）。嬉野ライトトラップ（予察灯）は農業技術防除センターで調査。

6月29～30日の嬉野ライトトラップは、装置の不具合により欠測。

注2)コブノメイガ：神埼市、白石町、伊万里市、武雄市は防除員が調査。佐賀市のフェロモントラップは農業試験研究センターで調査。

※長崎県のデータは、長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室提供。

トビイロウンカ防除適期

1回目 8/6～8/12

2回目 9/5～9/11



図1 トビイロウンカ各世代の発生予測（第1版、2025年7月2日作成）

コブノメイガ防除適期

1回目 8/5～8/14

2回目 9/8～9/18



図2 コブノメイガ各世代の発生予測（第1版、2025年7月2日作成）

3. 大豆における今後の管理

- ・平坦部では、今後播種期を迎えるが、予報を見ると今週末から来週前半にかけて曇りや雨の予報も出ている。但し、場所によっては局地的な大雨や逆に降雨が少なく乾燥した状態が続いている地区もある。不安定な気象条件下で、大豆の安定・多収を目指すため、

- ① 適度な土壌水分確保と適期播種（7月上旬中旬）＝「発芽・苗立ちの確保」
- ② 生育期間中の適正な土壌水分の保持＝「着莢数の確保、粒肥大」「適切な雑草防除」

が重要となる。

参考）週間天気予報（佐賀県：7月11日11時時点 佐賀地方气象台より）

11日(金)	12日(土)	13日(日)	14日(月)	15日(火)	16日(水)	17日(木)	18日(金)
晴後曇 	曇時々晴 	曇後一時雨 	曇一時雨 	曇時々晴 	曇時々晴 	曇一時雨 	曇一時雨 

1 土づくり

- 1) 土づくりでは、深耕と有機物の施用が有効である。
- 2) 深耕は大豆根群域の拡大を図り、有機物施用と相まって大豆増収に役立つ。
そのため、環境保全の面からも麦わらの全量還元に心がける。また大豆は、石灰の吸収量が多く、根粒菌の活動促進のため、石灰を施用する(pH6～6.5)。

2 種子消毒

- 1) 土中での種子の腐敗リスクを軽減するために、種子消毒（クルザーMAXX、キヒゲン R2 フロアブル）等を徹底し、発芽率向上に努める。

3 播種

- 1) 大豆の播種適期は7月上旬中旬であるが、それ以降の播種は生育量の確保が難しくなるため、播種機を設定し栽植密度等を調整する必要がある。

播種時期 (月/日)	栽植本数 (㎡当り)	栽植様式(例) (条数)条間×株間×1株本数	播種量 (/10a)	窒素施肥量 (/10a)
7/1～7/15	10本 13本	(2条)75cm×20cm×2本 (2条)75cm×25cm×2本	3～4kg	—
7/16～7/25 ※3条は7/20以降	18本 20本	(2条)75cm×15cm×2本 (3条)50cm×20cm×2本	5～6kg	—
7/26～7/31	24本 27本	(2条)75cm×11cm×2本 (3条)50cm×15cm×2本	7～8kg	4～6kg

4 播種における主な留意点

○乾燥時

- 1) 荒起しは、なるべく播種当日に行い、播種後に晴天が続く予報であれば、乾燥による発芽率低下が懸念されたため、荒起こしと播種耕起の間隔は空けないようにする。
(「6 干ばつ対策について」を参照)
- 2) 播種深度は、播種後に晴天が続く場合は 5cm 前後の深めにして鎮圧を行う。

○湿潤時

- 1) 大豆は播種後 2 日間の大雨や浸水で発芽率が著しく低下するため、大雨が予想される場合は播種を延期する（無理して播種しない、平うねの場合は深播きしない）。
- 2) 播種深度は、播種後に降雨が続く予報の場合 2 cm 程度の浅めとし播種後の鎮圧は行わない。
- 3) 土壌水分が高く、耕起できない場合は麦うねを利用し、耕起を行わず直接麦うねに播種する部分浅耕播種や不耕起播種、逆転ロータリを活用した播種等の技術で播種する。
- 4) 播種作業には、「うね盛り板」をロータリに装着してうね立て播種すれば、表面排水が良くなるため、滞水による出芽不良を軽減できる。また、小うね立て播種ではさらに効果が高い。

※ 大豆は湿害を受けやすいので、播種時の乾湿に係らず、播種完了時に必ず圃場の周囲に排水路を整備する。

5 干ばつ対策について（梅雨明け後、降雨が見込めない状況の場合）

1) 播種前対策

晴天が続き高温乾燥が予測される場合、コルゲート管の閉栓が土壌水分確保に有効である。

◆大豆生育期間中に必要な水量



播種前～出芽期は
排水対策

暗渠排水の栓を閉めるなどして
土壌水分を確保



大量の水を必要とする
ため干ばつが予想され
る場合は灌漑が必要

コルゲート管の閉栓

2) 播種後対策（大豆を播種したものの、まだ出芽していない場合）

（1）播種後、7日程度経過した圃場では、土中の種子を掘り返し、種子の状態を確認する。

- ① 播種時と変わらない種子の状態、降雨が期待できない場合、うね間灌水（注1）を検討する。

注1：うね間灌水は、夕方、日が陰ったあとに圃場に入水し、圃場に水が行き渡ったらすぐに落水し、少なくとも翌朝には完全に落水させる。日中の灌水は、高温・多湿により種子が腐敗し易い。

- ② 土中で出芽後に乾燥している場合、出芽しない可能性が高いため、再播種の必要がある。

（2）播種してから間もない圃場で、播種深度が想定より浅く種子周辺の土壌が乾燥している場合、梅雨明け後は高温・乾燥が続くため、速やかに畝間へ灌水しその後、速やかな排水を行う。

なお、平うねでの灌水は排水が遅延することから種子の腐敗を招くことが多いので、うね溝を設けるなどの事前作業を実施する。

注2：うね間かん水後は雑草の発生が多くなるため早めに除草剤散布等の雑草対策を行う。

6 雑草防除

1) 播種前対策

「ラウンドアップ」「プリグロックス」など非選択性茎葉処理剤の散布において、風の強い日の散布は周辺水稻へ飛散する危険が大きいため必ず避ける。（場合によっては枯死まで至る）

2) 播種後対策

播種直後に土壌処理剤を散布し、雑草防除を行う。特に、近年問題となっているホオズキの発生が多い圃場では、「ラクサー乳剤」「フルミオ WGD」が効果的である。

アサガオ類の発生が多い圃場では、「トレファノサイド乳剤」播種直前土壌混和处理で発生量を減らすことができる。

土壌処理除草剤の効果を高めるため、碎土・整地を丁寧に行い、播種後の鎮圧を必ず実施する。液剤の場合は、使用基準内で、多めの散布水量で散布する。

なお、播種直後の散布でも隣接圃場の水稻へドリフト防止のため風速と風向きに注意し、風が強い日には散布しない。

3) 難防除雑草への対応

アサガオ類やホオズキ類の難防除雑草の発生が多い地域では、圃場内侵入防止に努め、見つけ次第手で抜き取る。

圃場内に発生している場合、多発すると大豆の作付け自体が困難になるため発生が少ないうちに、雑草の開花や結実前までの茎葉処理除草剤のスポット処理や手取りの防除に努める。

注3）既にアサガオ類が多発している圃場では、トレファノサイド乳剤の播種直前土壌混和处理（播種前に200～300 ml/10a 散布→速やかに荒起→播種）で密度を低減できる。

ツユクサ類（近年、特にカロライナツユクサが蔓延）は土壌処理剤の効果が十分ではないため、「プリグロックスL」や茎葉処理剤（大豆バサグラン等）での除草を基本とする。

4) 大豆は初期生育が早く、大豆の茎葉が繁茂することで雑草発生を抑制できるので、雑草の発生が少なければ、早めに中耕培土で防除が可能である。

大豆生育期（2～5葉期）に中耕培土を実施する。

令和7年産水稻・大豆生育期間気象グラフ（アメダス：佐賀）

佐城農業振興センター

